

# 聖書日課 『からし種』 2019.12.22-29

<p><b>22日</b> <b>(日)</b></p> <p>サムエル記上 13章</p>	<p>「サウルは、サムエルが命じたように、七日間待った。だが、サムエルはギルガルに来なかった。兵はサウルのもとから散り始めた」(8節)。王となったサウルの焦りが伝わってくる。王として立てられた以上、彼は戦争に勝たなければならないからだ。しかし目前の戦いに勝つ以上に大切なことがある。それは主の御旨が示されるまで待ち、御言葉に聞き従うこと。</p>
<p><b>23日</b> <b>(月)</b></p> <p>サムエル記上 14章</p>	<p>「だが、祭司が『神の御前に出ましょう』と勧めたので、サウルは神に託宣を求めた」(36-37節)。サウルは「自分の目にふさわしいと思うこと(ペリシテ軍の追討)」を遂行しようとしたが、祭司は「神の御心を求めること」を進言した。その結果サウルは自軍の規律の乱れの点検へと導かれる。神が「一呼吸おきなさい」と言われる時は、自らを点検する機会かもしれない。</p>
<p><b>24日</b> <b>(火)</b></p> <p>サムエル記上 15章</p>	<p>「主の言葉がサムエルに臨んだ。『わたしはサウルを王に立てたことを悔やむ…』。サムエルは深く心を痛み、夜通し主に向かって叫んだ」(11節)。サウルに対する主の厳しい言葉に、かつて彼に油を注いだ責任を自覚し、心を痛み、夜通し神に叫び祈るサムエル。その姿に、神の言葉と人びとの罪の間で苦悶し、執り成そうとする預言者の姿を見る。</p>
<p><b>25日</b> <b>(水)</b></p> <p>サムエル記上 16章</p>	<p>「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」(7節)。人間はどうしても外見にとらわれ、ごまかされてしまうことも多い。しかし、主なる神にはごまかしは通用しない。主は心において人を見られる。私たちも心において神を見る信仰を求めていきたい。</p>

<p><b>26日</b> <b>(木)</b></p> <p>サムエル記上 17章</p>	<p>「主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主のものだ」(47節)。剣と槍で武装した大男ゴリアトに対して、ダビデは「主の名によって」立ち向かった。中村哲さんが主イエスにならない、命を注いだ平和の働きを想う。「戦争よりも、平和をつくり出す方が何倍も困難で忍耐と勇気を必要とするのです。」</p>
<p><b>27日</b> <b>(金)</b></p> <p>サムエル記上 18章</p>	<p>「サウルは、主がダビデと共におられること、娘ミカルがダビデを愛していることを思い知らされて、ダビデをいっそう恐れ、生涯ダビデに対して敵意を抱いた」(28-29節)。人は他人の心を支配できないし、まして主の働きを阻止することなどできない。むしろ自らの無力を認め、思い通りにならない相手に敵意を抱く自らの心の闇と向かい合うべきではないか。</p>
<p><b>28日</b> <b>(土)</b></p> <p>サムエル記上 19章</p>	<p>「なぜ、罪のない者の血を流し、理由もなくダビデを殺して、罪を犯そうとなされるのですか」(5節)。サウルの息子ヨナタンは、ダビデの信仰の誠実さを認め、深い友情を育んでいた。このヨナタンの、父の権力におもねることない、「平らで、自由で、しなやかな、神に向かう信仰」の清々しさ。人を見るのではなく、神を見る信仰をヨナタンは教えてくれている。</p>
<p><b>29日</b> <b>(日)</b></p> <p>サムエル記上 20章</p>	<p>「わたしとあなたが取り決めたこの事については、主がとこしえにわたしとあなたの間におられる」(23節)。ダビデとヨナタンは、共に生きる道を探ろうとした。主がくださる出会いの中には、主がとこしえにおられると聖書は語る。信仰共同体の中に、主がとこしえにおられることを覚え、主が加えてくださる新しい友と一緒に新しい共同体として歩む私たちとされたい。</p>